

退職者からのメッセージ

感謝

田中尚

何年か前のことである。ライブラリー・アテンダントをしていた4年生のAさんから、学生への推薦図書(確か、「学生におすすめしたい図書」というタイトルの依頼だった)の原稿を依頼されたことがあった。それを図書館だよりに掲載したいとのことであった。このような依頼が自分に舞い込んでくるのがうれしく、新鮮に覚え、また、Aさんからの依頼とあっては断れないと、二つ返事で引き受けた。学生に薦めたい推薦図書ということで、いろいろと考え、悩んだうえで4冊ほどに絞った。そこから1冊にしようかと考えていたが、その時はどうしても絞りきれず、とりあえず2冊の推薦原稿を提出し、Aさんとの約束を果たせたと安堵したように感じていた。しかし、どういふわけか、あとの1冊を推薦図書として紹介できなかったことが、ちょっとしたささくれのように残っていたことの方が大きかったように思う。その後、そのような機会はなく、多少気になりつつ今に至ったが、今回、「退職からのメッセージ」という形での機会をいただき、何年か越しの気がかりを溶くことができると思う。どうかお許し下さい。

その本は、遠藤周作著「沈黙」(新潮社、昭和45年発行)である。確か、私が20代の頃に友だちに薦められて読んだのを記憶している。そして、何か自分にとって大きなことがあった時などに、何故かこの本のことを思い出し、なにかと考えることがあった。そして、この小説のタイトルにあるように、問いかけても「何も返って来ない」、まさに「沈黙」を受けることになる。それは、この小説をすでに読んでいるから、タイトルさながらに、問いかけには単純には何も返って来ない。むしろ、やすやすとは返って来るものではないと自分自身が決め込んだうえで、自身にふりかかったことへの問いかけをしていることもあって、「何も返ってこない」ことに対して奇妙な満足感を得ながら、その場を過ごしてきたところもあったように思う。しかし、改めて、問いかけても「何も返って来ない」ということに、何を見出したらいいのだろうか。そこにこそ、この小説の問うているところがあるように思う。

この本の主題の一つは、「神の沈黙」である。主人公は17世紀の初めにキリシタン禁制の日本に渡って

きたバテレンのロドリゴであるが、彼は厳しい拷問等により、ついに転向し、背教することになる。その過程のなかで、信仰と背教を中心に様々な主題となる問題が投げかけられる。「神は本当にいるのか」「いるのであれば何故答えてくれないのか」「黙っていることに何かがあるのか」「沈黙から何を聞こうとするのか」、さらに厳しい迫害や拷問を受ける中で「自分は何を守ろうとしているのか」、そして「救いはないのか」「人はなぜ救いを求めるのか」といった究極的な生の実存に対して、自分をどのようにおき、現実と向き合い、折り合いをつければ良いのか。その呻きに近いような問いかけの繰り返しかえしのなかで、無力と絶望を感じながらもそこにいる自分と現実との折り合いを見つけようとする。科学的な論拠による説明や合理性を超えた中で生きているのが人の現実であり、客観的な論理では割り切れないものを人は背負っている。福祉の問題にどのように向き合うか、そこでの一人ひとりのどうしようもない現実にどのようにいることが許されるのかを考えていた。そして、小説と同様に「何も返ってこない」。

その後、実践の現場から岩手県立大学に着任する機会を得ることになった。今も自分の中ではそのような問いかけは続いているが、現場実践での問いかけていた状況とは異なり、多くのこれからの時間を生きる若者たちとのかかわりの中での問いかけが加わってきた。毎年、多くの学生に巡り合い、志望動機や社会福祉への関心のあり様に関連して、その人なりの何故を問いかける営みである。そして、自分自身はどうであったらうか、何を考えていたのか。何故、この世界に入ってきたのかを反芻しながら、学生たちにこれまでの自分を投影しながら聞こうとしている自分がある。年齢を重ね、それなりの経験を経るたびに、自分を正当化し、後付けで物事を説明することが多くなってきたように思うところがあるが、どこかで、若い学生たちからのみずみずしい思いや動機に触れることで自分を支え、今も沈黙の意味を求めようとしていると思う。そのような力を与え続けてくれた学生の皆さんに感謝の思いでいっぱいである。